

## 第24回東アジアシンポジウム

2017年10月16日（月）～18日（水）の3日間、琵琶湖ホテル（大津）で第24回東アジアシンポジウムが開催されました。

このシンポジウムは、東アジアの生命科学分野における研究者間の情報交換と交流を深めることを目的に約20年前に始まり、参加機関が順番で主催しています。今年度は京都大学ウイルス・再生医科学研究所が主催機関となりました。

東大医科研からは7名の研究者が参加し、シニア研究者は15分間の研究発表、若手研究者は5分間のショートトークとポスター発表を行いました。前回同様、発表時間及びショートトークの持ち時間が短くなりましたが、その分ポスターセッションの時間を長くとることができたので、若手研究者も自身の研究成果について参加者と時間をかけて議論することができました。

来年はSIBCB, CAS 主催で行われる予定です。



## 第23回東アジアシンポジウム

10月18日（火）～20日（木）の3日間、台湾師範大学で第23回東アジアシンポジウムが開催されました。

このシンポジウムは、東アジアの生命科学分野における研究者間の情報交換と交流を深めることを目的に約20年前に始まり、参加機関が順番で主催しています。今年は国立台湾師範大学が主催機関となり開催されました。

東大医科研からは12名の研究者が参加し、シニア研究者は15分間の研究発表、若手研究者は5分間のショートトークとポスター発表を行いました。前回と比べ発表時間及びショートトークの持ち時間が短くなりましたが、その分ポスターセッションの時間を長くとることができたので、若手研究者も自身の研究成果について参加者と時間をかけて議論することができました。

医科研のベストポスター賞には、三好貞徳さんが選ばれました。

来年は京都大学ウイルス・再生医科学研究所主催で行われる予定です。



## 第22回東アジアシンポジウム

11月11日（水）～11月14日（土）の4日間、沖縄で第22回東アジアシンポジウムが開催されました。

このシンポジウムは、生命科学分野におけるアジアの優秀な研究者間の交流を深めることを目的に約20年前に始まり、参加機関が順番で主催しています。

今年の主催機関は沖縄科学技術大学院大学(OIST)で、参加機関は今年から韓国順天郷大学(SIMS)が加わり、合計8機関となりました。

東大医科研からは13名の研究者が参加し、シニア研究者は25分間の研究発表及び質疑応答、若手研究者は10分間のショートトークとポスター発表を行いました。

前回と比べると、発表時間及びショートトークの持ち時間が5分ずつ広がり、また参加機関数も増えたため、ややタイトなプログラムとなりましたが、参加者達は疲れも見せず積極的に議論を繰り広げ、皆の意識の高さが表れた4日間になりました。一方で食事会やキャンパスツアー、首里城等の見学は、沖縄ならではののんびりとした雰囲気と相まって、とても和やかに行われ、参加者同士の交流も深めることができました。

来年は国立台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所主催で行われる予定です。



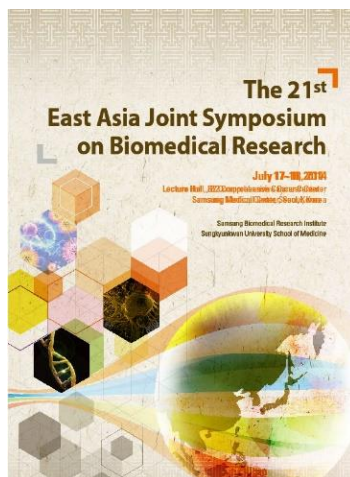


## 第 21 回東アジアシンポジウム

7月17日（木）～7月18日（金）の2日間、韓国成均館大学校医科大学の主催でソウル市の SAMSUNG Medical Center にて第 21 回東アジアシンポジウムが開催されました。このシンポジウムは生命科学分野におけるアジアの優秀な研究者間の交流を深めることを目的に 20 年前に始まり、参加機関が順番で主催しています。本年は東大と成均館大の他に京都大学ウイルス研究所 (IVR)、中国科学院上海生命科学研究員生物化学細胞生物学研究所 (IBCB)、台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所 (IBMB)、ソウル大学分子生物学遺伝子研究所 (IMBG)、沖縄科学技術大学院大学 (OIST) の計 7 機関が参加しました。

東大医科研からは PI 4 名と若手研究者 4 名が参加しました。PI は 20 分間の研究発表と質疑応答を、若手研究者は 5 分間のショートトークとポスター発表を行いました。その内容はとてもハイレベルなもので、アジア圏の研究所のレベルが非常に高くなっていることを改めて感じさせられるものでした。また、雰囲気は例年通り極めて和やかで友好的であったことも大きな収穫でした。このシンポジウムを契機に共同研究が生まれることを期待できるものとなりました。

19 日（土）には、Dongdaemun Design Plaza と Seoul N Tower を訪問して参加同士の交流を深め、本年も大成功のうちに幕を閉じました。来年は沖縄科学技術大学院大学 (OIST) 主催で行われる予定です。



## 第 20 回東アジアシンポジウム

2013 年 11 月 6 日（水）～11 月 8 日（金）の 3 日間、医科学研究所主催による第 20 回東アジアシンポジウムが、東京大学本郷キャンパス 伊藤国際学術研究センターにて開催されました。今年は、東京大学伊藤国際学術研究センター会議との共催となり、テーマは“22 世紀を目指した医科学を通じた国際貢献”でした。

### 参加機関

中国科学院上海生命科学研究院生物化学細胞生物学研究所（SIBCB）

国立台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所（IBMB）

韓国成均館大医科大学三星生物医学研究所（SBRI）

ソウル大学分子生物学遺伝学研究所（IMBG）

京都大学ウイルス研究所（IVR）

東京大学医科学研究所（IMSUT）

沖縄科学技術大学院大学(OIST)

本シンポジウムの 20 周年を記念し、今回は通常のシンポジウム 2 日間に加えて 20 周年記念特別シンポジウムを 1 日開催し、東アジア圏の著名な研究者 10 名にご講演頂きました。医科研からは 9 名の教職員、大学院生が発表に参加しました。



## 第 19 回東アジアシンポジウム

2012 年 8 月 23 日（木）～8 月 24 日（金）の 2 日間、ソウル大学分子生物学遺伝学研究所の主催でソウル市の同所にて第 19 回東アジアシンポジウムが開催されました。このシンポジウムはバイオメディカル分野におけるアジアの優秀な研究者間の交流を深めることを目的に始まり、参加機関が順番で主催しております。本年は東大と成均館大の他に、主催機関であるソウル大学分子生物学遺伝学研究所 (IMBG)、京都大学ウイルス研究所(IVR)、中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所(IGCB)、台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所(IBMB)の計 6 機関が参加しました。

今年のテーマは、"Molecular Understandings for Physiology and Pathology"でした。

医科研からは教員 3 名と大学院生またはポスドク 5 名が参加しました。

医科研・若手発表者の倉島洋介さんが Outstanding Young Scientist 1st Place TOMY Award を受賞されました。

発表タイトル：Acceleration of Intestinal Inflammatory Responses by Extracellular Nucleotides-mediated Mast Cell Activation



## 第 18 回東アジアシンポジウム

2011 年 12 月 7 日（水）～12 月 9 日（金）の 2 日間、中国科学院上海生命科学研究院生物化学与細胞生物学研究所の主催で、上海の同所にて第 18 回東アジアシンポジウムが開催されました。このシンポジウムはバイオメディカル分野におけるアジアの優秀な研究者間の交流を深めることを目的に始まり、参加機関が順番で主催しております。本年は医科研と成均館大の他に、主催機関である中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所(BCB)、ソウル大学分子生物学遺伝学研究所 (IMBG)、京都大学ウイルス研究所(IVR)、台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所(IBMB)の計 6 機関が参加しました。

医科研からは教員 4 名と大学院生またはポスドク 4 名が参加しました。



## 第 17 回東アジアシンポジウム

7月1日(木)～7月2日(金)の2日間、「第17回東アジアシンポジウム」が台湾にて開催され、東京大学医科学研究所(以下「東大医科研」)を含む6機関(国立台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所、中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所、ソウル大学分子生物学遺伝学研究所、韓国成均館大、京都大学ウイルス研究所、東大医科研)が参加しました。東大医科研からは教員5名、博士課程大学院生4名が参加し、教員はそれぞれ20分の口頭発表、学生は研究成果のポスター発表を行いました。

本シンポジウムは、東アジアにおける医科学分野研究者間の交流を深め、より一層の連携を促進することを目的としています。また同時に、若手研究者に国際的な場で成果発表をする機会を与えることで、若手研究者育成という点においても大変重要な役割を担っています。

今回は、本シンポジウムを御支援頂いている「トミー精工株式会社」から優秀若手発表者に贈られる恒例の「TOMY Award」に加え、主催側からもさらに3名の優秀若手発表者に賞が贈られました。東大医科研からは理学系研究科博士課程3年の伊藤健太郎さんがTOMY Awardの第2位を、新領域創成科学研究科博士課程3年の森祐介さんが主催者からの優秀若手発表者賞を受賞しました。



## 第16回東アジアシンポジウム

9月12日(土)～9月15日(火)の4日間、京都大学ウイルス研究所の主催で第16回東アジアシンポジウム(於:京都大学医学部芝蘭会館・稲盛ホール)が開催されました。本来6月末に開催予定だったが、新型インフルエンザの影響により9月に延期となったものです。

このシンポジウムは、東アジアにおける優秀な若手研究者の交流を深めることを目的としています。本年は、東大と京大の他に韓国成均館大(SBRI)、中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所(IGCB)、国立台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所(IBMB)、ソウル大学分子生物学遺伝学研究所(IMBG)の計6機関が参加し、各機関からはそれぞれ教員4名と大学院生及びポスドク5名が参加しました。

シンポジウムは教員による20分間のプレゼンテーションと大学院生及びポスドクによる5分間のプレゼンテーションとポスター発表によって構成されています。全員参加型のため、異なる分野の最新の研究内容を相互に理解できるという利点があります。発表の内容は皆とてもハイレベルで、プレゼンテーションの仕方も工夫されており、大変刺激を受けました。また、恒例として大学院生またはポスドクの優秀発表者には本シンポジウムに寄付を頂いている「トミー精工株式会社」より賞品が贈られ、本年は中国科学院IGCB、京大、成均館大学の学生らが表彰されました。

セッション後の懇親会でも、引き続き国境を越えた有意義なディスカッションをすることができました。参加者全員の研究内容を理解できたことが、ディスカッションの盛り上がりの要因の一つであったように思われます。そして最終日の京都半日観光ツアーでもさらに参加者同士の交流を深め、本年も大成功のうちに幕を閉じました。来年は国立台湾大学主催で行われる予定です。



## 第15回東アジアシンポジウム

7月20日(日)～7月23日(水)の4日間、韓国成均館大学校医科大学三星生命科学研究所の主催でソウル市の SAMSUNG Medical Center にて第15回 East Asia Joint Conference(東アジアシンポジウム)が開催されました。このシンポジウムはバイオメディカル分野におけるアジアの優秀な研究者間の交流を深めることを目的に14年前に始まり、参加機関が順番で主催しております。本年は東大と成均館大の他に京都大学ウイルス研究所(IVR)、中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所(IGCB)、国立東アジアシンポジウム2008台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所(IBMB)、ソウル大学分子生物学遺伝学研究所(IMBG)の計6機関が参加しました。

各機関からはそれぞれ教員4名と大学院生またはポスドク5名が参加しました。教員は20分間の研究発表と質疑応答、大学院生またはポスドクは5分間のポスター発表を行いました。その内容はとてもハイレベルなもので、アジアがバイオメディカル分野の研究において世界をリードしていくであろうという見方を確固たるものにしました。また、例年「トミーデジタルバイオロジー株式会社」より寄附を頂いており、投票によって選ばれた優秀な発表者には賞品が贈られる。本年は中国科学院 IBCB、京都大学、ソウル大学の学生が表彰されました。シンポジウムは最終日のソウル市内観光をもって大成功のうちに幕を閉じました。来年は京都大学主催で開催予定です。

